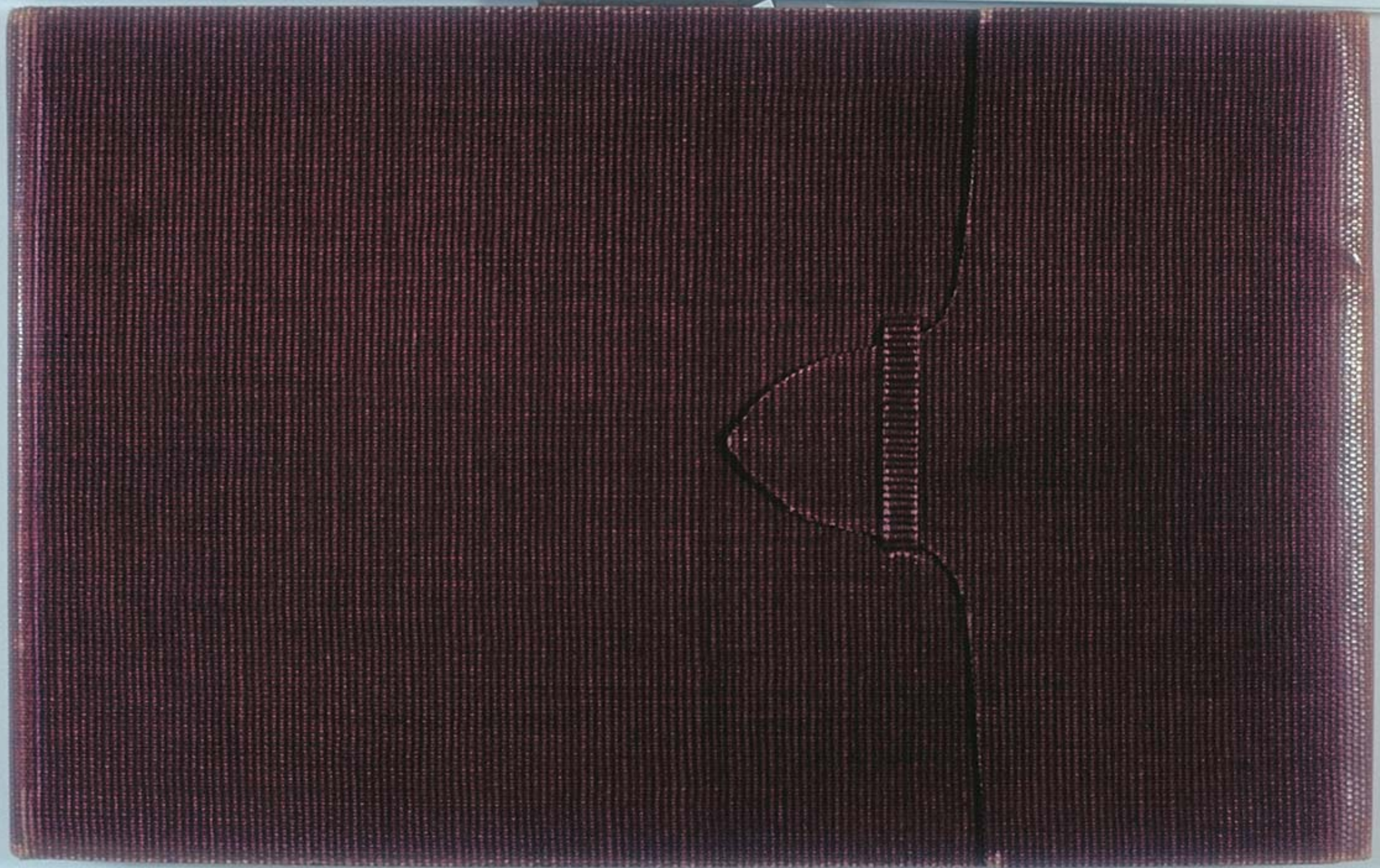
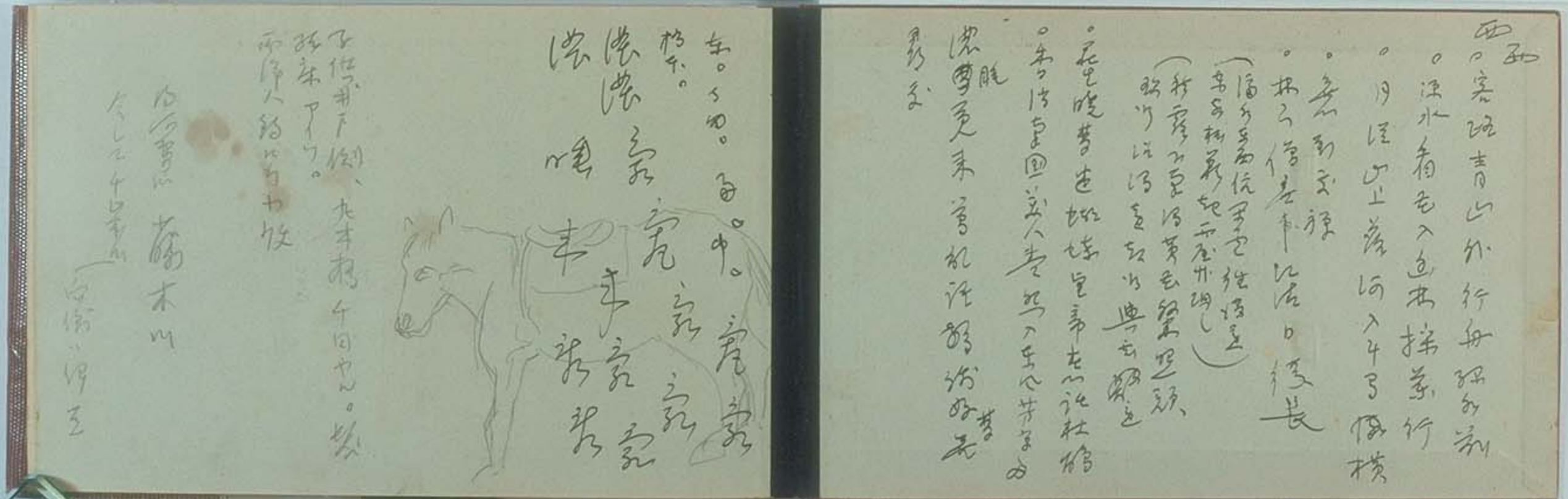
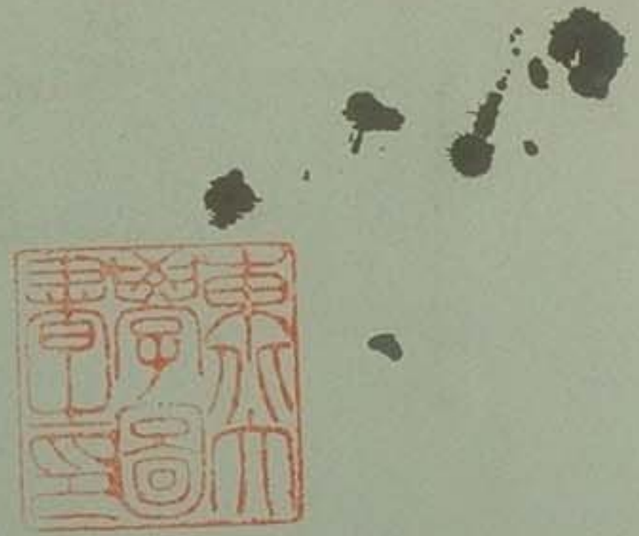
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

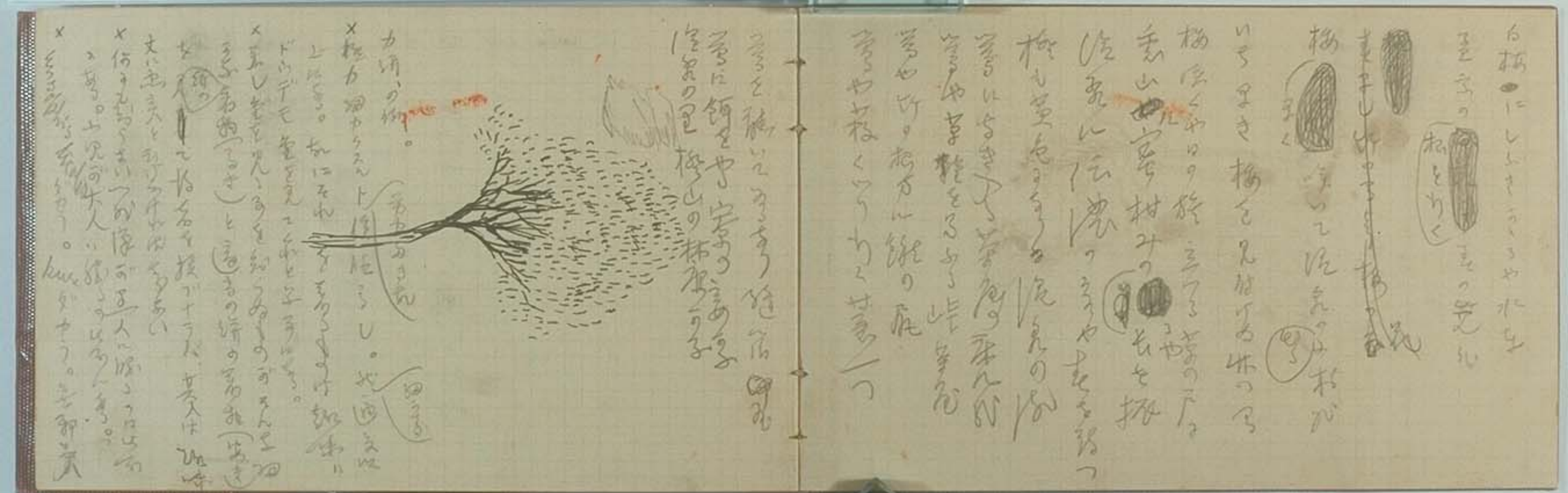




手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

東北大学図書



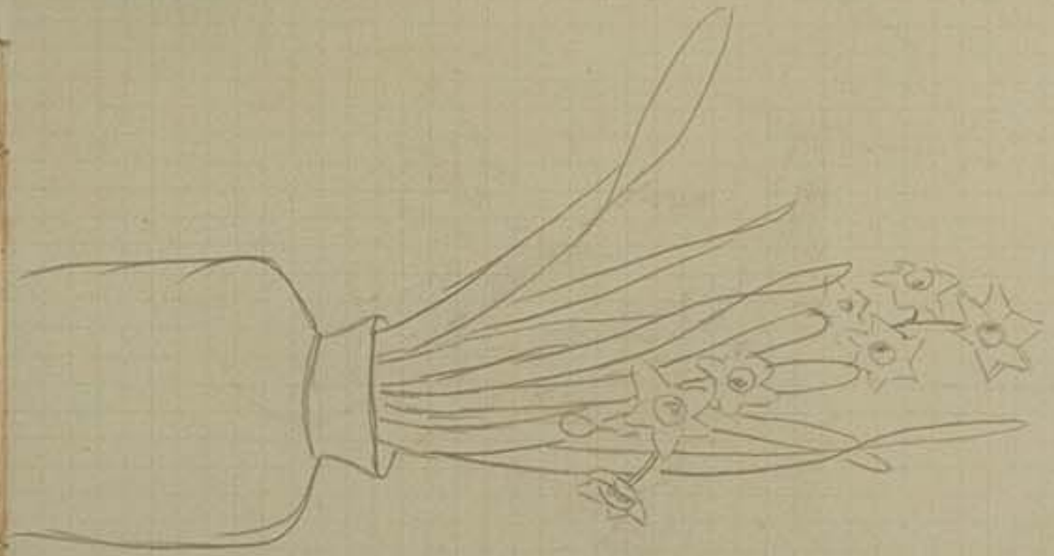


ダカラ。

×此の頃の人は懐古趣味に富む。競争に疲れ
始めて〜の金の時代を羨しく思ひ
出すのだろう。つまり過去を知らない立
ちこれ。要至とあるいは
×日本に結力の一の純粋を書籍をと
思はれ。ぐんぐんぐんぐんなど　こ
ぬる
両点りくとしてうるる
×日本に対する観念　何なかへ戻る
をしてそれぞれ　もしもしもしもしもしもしもしもしもし
面白さ　年とともすりる。　ものもしもしもしもし
る。　表紙（四枚ばかり）の　絵画ともも
ようにする。　切りつくしさ　修山えさやる
しのでしょうどうもまもまもま

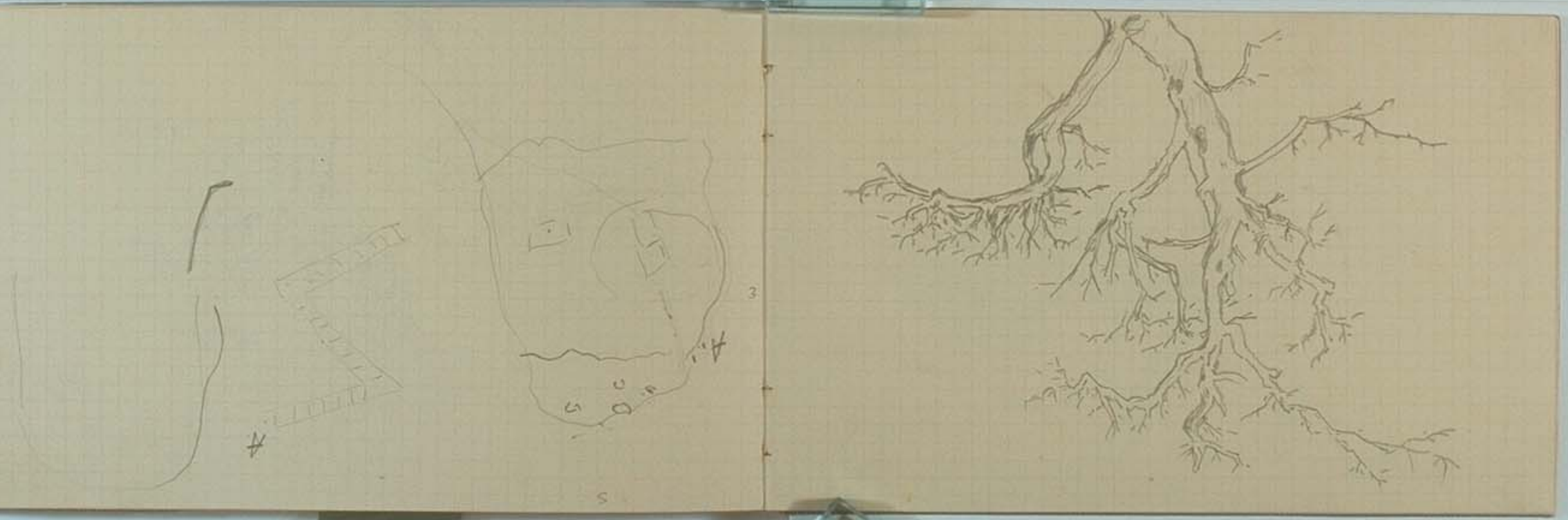
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

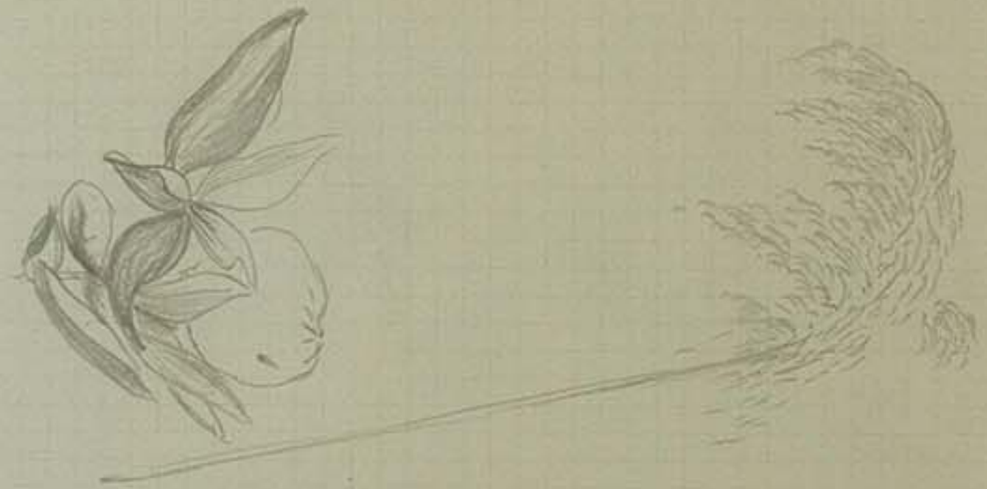


手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

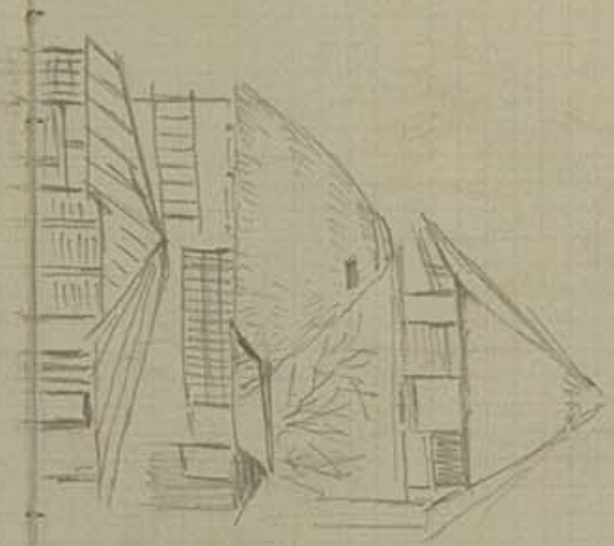
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



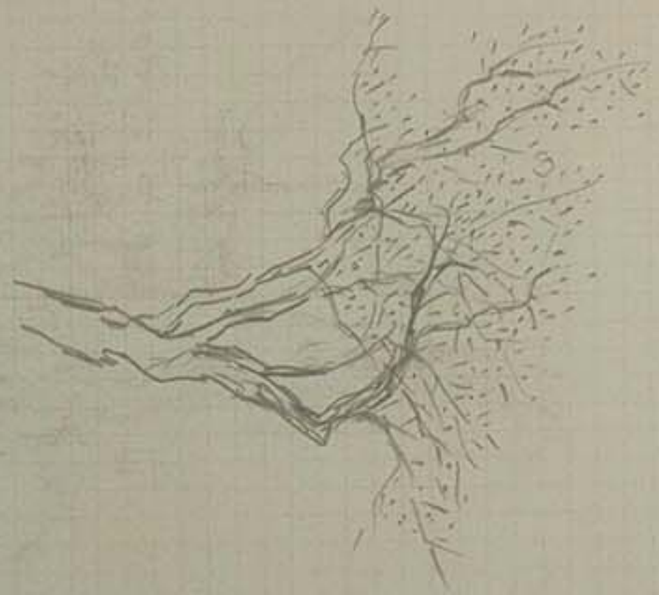
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



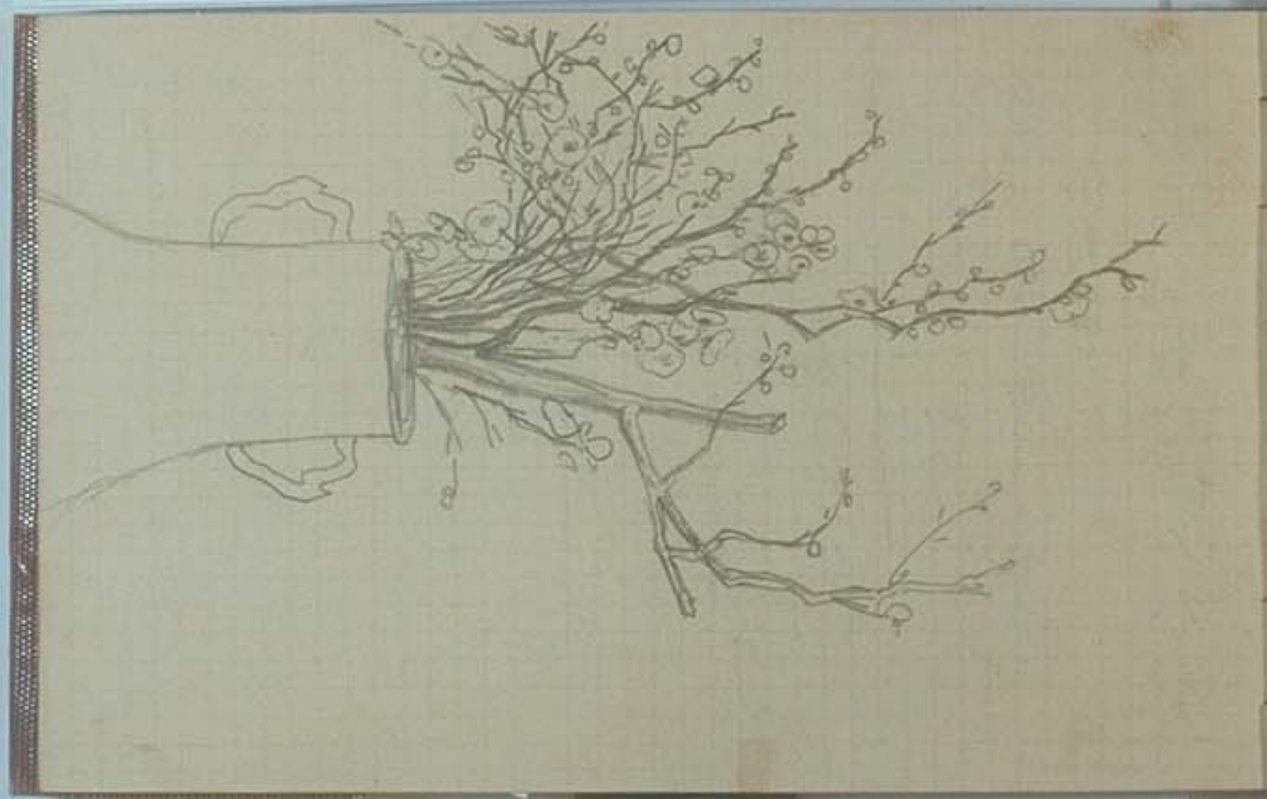
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）

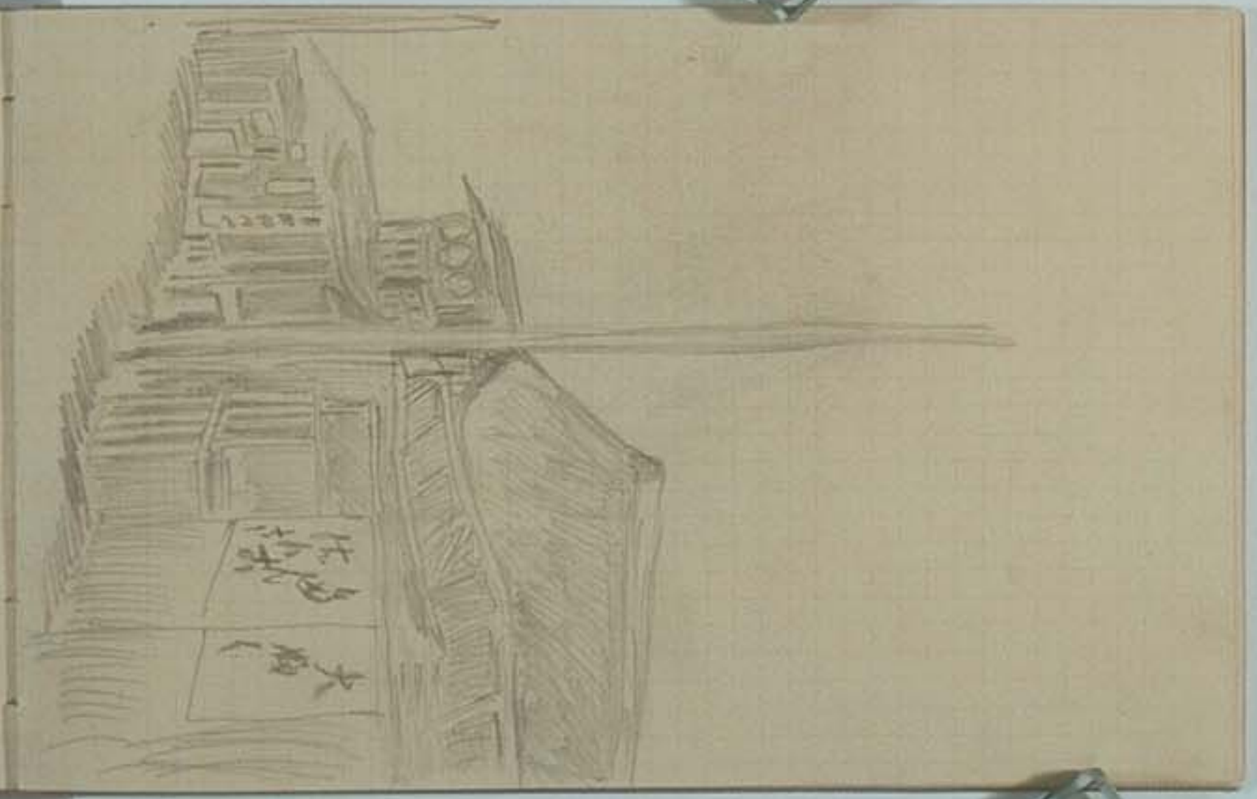


手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



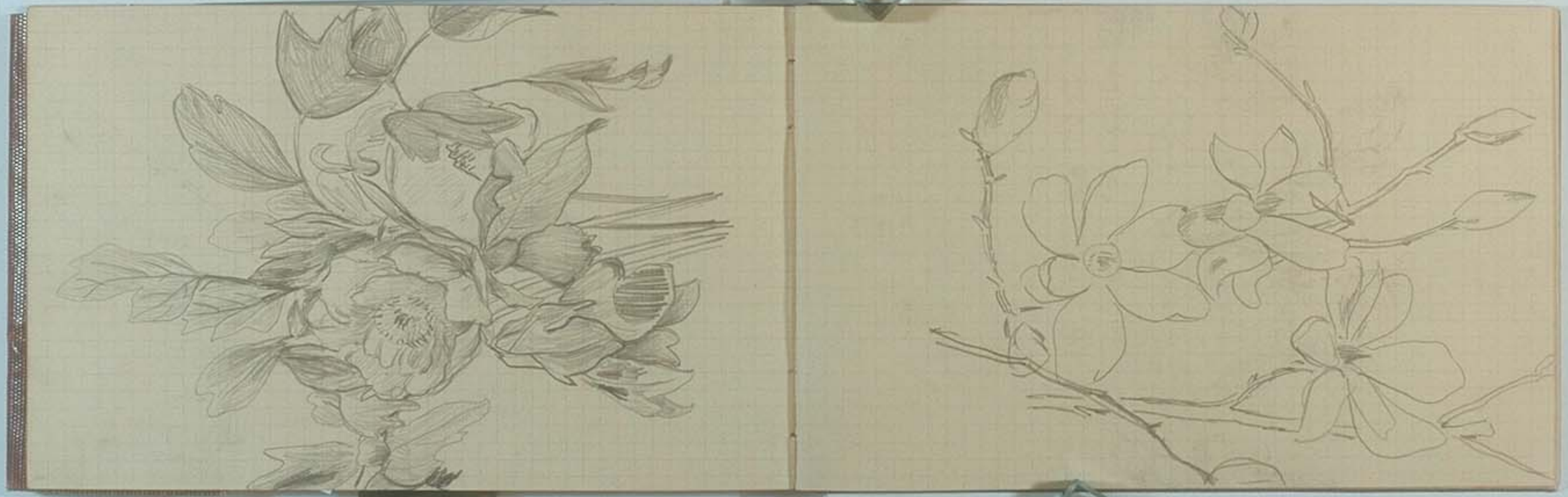


[illegible]

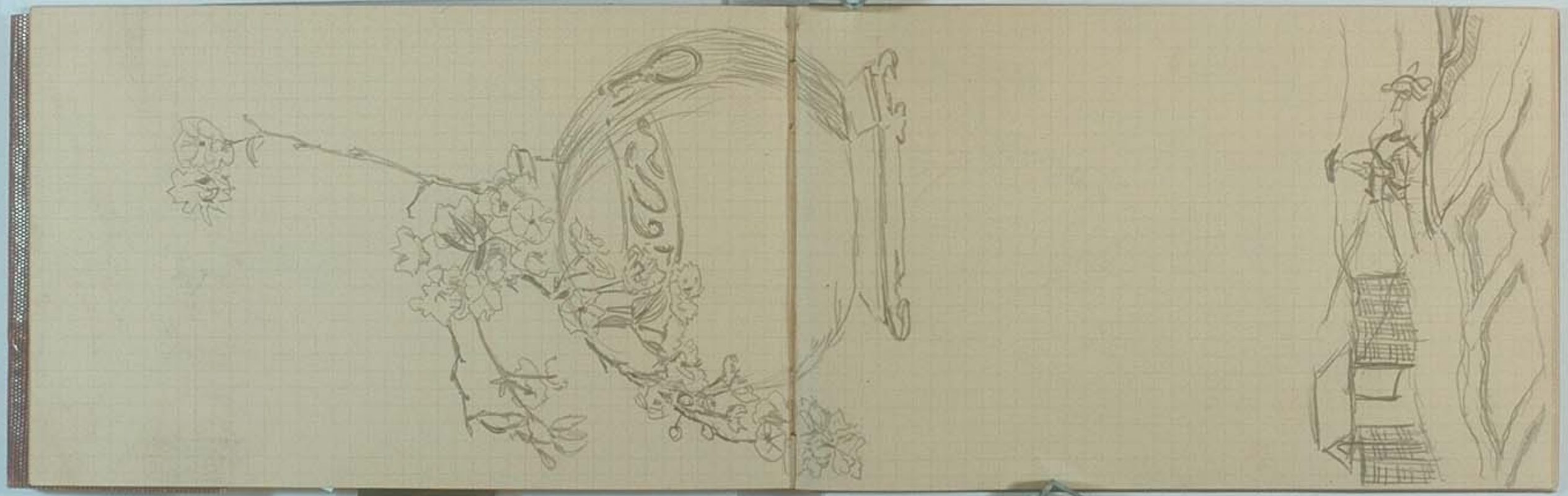
[illegible]

[illegible]

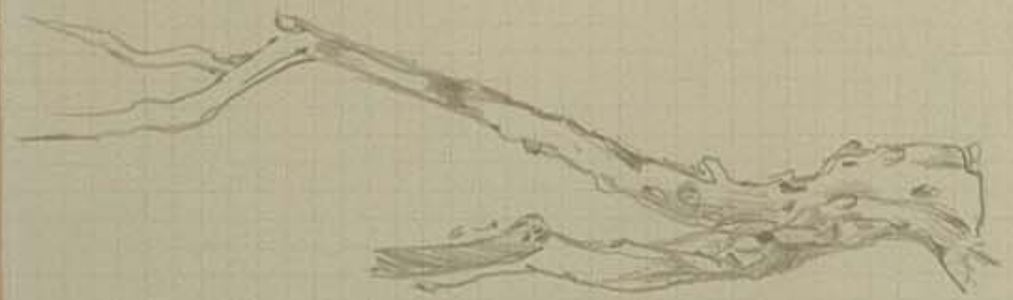
手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）



六月九日　小雨の夜明

○雪仙花　花（赤い）さく

○わすれな草。　赤い小さいデーカラーノ五瓣

○孔雀草、　花八　瓣の赤（黒赤）

○ヵ柳草

○わるもこう　葉

○紫陽花。　もさ四寸程

○菫　三寸程花あり　淡紫

○野菜

○おいらん草

○おしろい草。まだ咲かず。八月さく

○百合

○カニナ（まだ咲かず）　咲いて見あり

○夜の花（夕花）

○きるまん草。

七月十一日　梅雨　初晴

午後（土曜）　パンよりニ合一ニテ試験

七月二十四日（土用丑の日）　雨模

雨、暑。　弁のこやつを洗濯の出番。

○六月三日頃。八二ページ五分二ノ試験。教先条穂分

六月三日　梅雨のきりに降る。出る前梅雨もどきとなる暑さ。午後は晴一時、五時前より白地の浴衣を着、小供は水泳をする。今日はさすがに白地を着る。油の匂に白の帷子を着ぬ。

六月二十三日。白百合、桃ザクロ梅のさいの花。蓮の花、ジャニアム

六月二十二（二十七）雨。羽織を着てもさし

二十八　陰　先張さし

青葉

白鳥花に色をなるもの、二のりすの、葉の色　黄色ゴム

○上野で蓮ゴザリ（二）で色をとる。（手でとる）。ゴムよりもの七外仕る。参考（参照）

蓮の刈入

ヒバ　カナメ　苔

青梅　一面

五月　青梅電車　一面

松　みどりの長く光る、青、青五月

青下白　季節もの　青鬼灯、所々白き花

六月　二十九日　午後。晴。六月三日頃、八二ページ二分ノ一で原にて糸穂分の試験午後と教に糸穂分なし。晴に出る。

六月三十日　バンドマン　行

「そりゃお気毒さまだ」
「ずいぶんひどく降ったもの」
「まうちくは行かないや」
「おなさま・ご定 ご軍艦とおいで。
おみやさま」
「お女さま達はその方がおいや
「何の」
「何かつゝ詰めいう」
「ずつと地震のはじまり降るかも
あいの」
「バーア軍艦まく降りまいの。こりゃ
家が揺うまうつくよ」

六月初
柿の花咲く。一三日頃の花（柿に
んど）咲く。遠ん時ご（其）形を
ぬに来る。

六月七日
長世訊の死
キツケナーの溺死
東北海道球の陸ウキーメリ号に乗船
宮として女（と）ゴ下お小佐の死
一説に後ろ、其の他
タゴールが横山大観の家に逗留する。
ずいぶんひどい。二九歳の時
死ぬ。来、太郎から三人三伸ばる
金の子

六月十五日　薩摩上布（三十三四）十
字絣ぬ竹すき着
六月十六日（十七の）
大風。柿の（三えんくゃうえ）実落つ。家
の花。スミス堅実

六月十六
メ三ツ立猪　　桂昌
メより三ツ立　　夏の蝉
メ沈丁ツ
メ青梅ツ
メ西瓜ツ

。伸び伸びして好きな事が好き。でも
義務のようなものは嫌で伸び伸びする。
。めをねしらんの母の心配の為。逆
恩の方法・母の実者の心のほうで仕物の
気の。

五月三日
。柳ふの桜走つき。五月三十八日
ちゃ柳ふ電話。午、晩、三十七銭、
の原を例のあとパン三ふ一で代を。
三銭送る。三十一の電話まで報告。
午のふに出る。それは乳脳を使力仕事
（西洋一回を書く）の為ばらうとの為。
それ毎日一回起原の桜走」をやる
とふ。毎ふに出る柳ふは家のらも
暑るは。さう移の如きは研究のため
自ふの力使の表を使ってみる也。
六月二日　子供と汽

「お父さん事是が出ると何の悪いもの
のあるんのもう」
「芝はきらさ。人が沢山あるから。
中は人の多の多の新って来ふ
ちゃんちゃんいふい」
「西洋では芝ふあい」
「でもシーザーの死を前のように芝を
ぶせとってふちめるいの」
「うんシーザーの死まる前のうの。そう
「ブーサンまるおれと中のまい狐みず
死んだまう」
中寝るのが代ばふふ。
「お父さま地面のはれひせう」
さうされば井戸切ると丸ふ
ふの」
「それが出ず地面の変ちふ」

小平五日位に送るようにする。（今朝に見たらつゝ子あすの月曜が丁度一週間目である）

×二十六日　昨夕電話。原に幸さし～頼さしつゝ

上野の仕様を作って見ようという試験をする。土曜日（三十一日）に見る為に脱を寄越して色々の小説を出した。

二日目の原を送れとまつてゝる。

×二十九日　夜　昨夕の電話。原原稿小説。今夜は翻訳出作の小説一を続ける。晩、三度目って（会社宣伝さし～勝脱にくまる会社三日目の原を三枚よせといわれである。三十日の原を持参）の為に寝～一日に送るようにする。

×五月二日　まさ子より電話。此日の原には異状なし。午に翻訳出作の四分一、晩に三分一を書つゝ会社三日目の原を多ばかりとする。

×三日　夜　まさ子より電話。パン出作の四分一では横がおもしろいよ。明日は三色出二分一を出せ出来る為の原を上げたとする。

×五月六日　まさ子より電話。此日の原には異状なし。午に翻訳出作の四分一、晩に三分一を書つゝ会社三日目の原を多ばかりとする。

×三日　夜　まさ子より電話。パン出作の四分一では横がおもしろいよ。明日は三色出二分一を出せ出来る為の原を上げたとする。

×五月六日　まさ子より電話。此日の原には異状なし。午に翻訳出作の四分一、晩に三分一を書つゝ会社三日目の原を多ばかりとする。

×五月六日　まさ子の電話。原稿。午に翻訳出作の四分一、晩に三分一を書つゝ会社三日目の原を多ばかりとする。

×五月十六日　送原稿。十六日。明日。十七日。明日の電話。パン出作の三色。十八日夜電話。翻訳二通は出ず一通は残る。

×未来事。五月雪。桜梅　芽をやく。蕾が行き上に新芽一面に出る。カナメも同じ。蕾の芽二尺程になる。来に桜円形になる。

水仙

○自然科学一般化　その化学を個性に通用する。色物の研究を

○科学（哲学と文学）　個人主義。

対象は出来る。ニヴァーサリティーの程度（内容）

○言葉に入つて作者すべし。作者して作品動すべし。作方でルいすぐ・煙れ

年寄れ　年寄れ。個人的～ようの後悔

いる。甲　横　心　思　で　多　時　実　私　に　実

入されては困る。この心持でも時に言語表

とは出る。

まこの三日にを加つの。世力弱まると似ます。男性化として力強さを感ずる。信にる。又是位す。平家で始めの夫と名す。

○四月廿二日　春の季節

※若い蓮葉延びつくす
※桜山の桜ぼんぼり数つ点す
※小梅（こうめ）梅。花咲く。白あぶれ
※桃花咲く
※ぎぼし延びる。芍薬のびる。
※れん花草の花芽のびる。未開。
※いう春花花咲く
※ラッパ水仙の芽をおく
※ひまわり花咲く
※苗代。稲籾　松葉牡丹、ダリヤの芽、
※芝蓮芽を吹く
※山吹花咲く。
※ヶ形芽を吹く一寸
※蓮芽二寸
※芍薬の芽を吹く一寸五分位。
※白金芽　六寸。但し花は既にあり。
※松柳芽を吹く

○昨日三月の
○郵便廃。活版の印刷に従し
芽ふの五行の変化。大学の組織的活動
を望む。体操、精力分散といふ。
※三月廿日　居白性の北のぼうり会つて、二月日の
二十四日の床を送る。此床二十四日の
は棒かすとりつの。おし二十四日で始め
られて居る。精のむを心ゆ三月の
ふを達んで戦争とふ
※其等会を考ふる所肺を空虚に
して生じて会は三月の床、乾重、此に
知りて、翌既（二十二日）送る
（加つて生じて）
※二十三の私を、結ふ変化。精は出始りも
るが、前の半分に減じて此月は二十四
日の床を送つく。ナガ平生を物を取り、又
戦後のあを安いを会を変更しくく
ふ、これ一度戦争しい、且此会すでどの
位精が減じ又身体が保つの戦争しま
ばまりかいとい。即ち廿四日二十五の床を三回

あの遠くで家の灯に照らされあの灯は何う
なるのだろう。蓮根を入れ合けあいはは
拔いてある。

○実は実は実はなしを自分
らを自分なし。実はともさ自
分ともつのまるをなる男まり。
実はなんは男の性格に日元ろも
うやくますさを言はまで二方が
い。（現の日記）

○藤の木。ろ点灯の底の上に桜を
結ってある。其傍にサイカチの木が
ありてそれに藤の枝が絡まってゐる。
ろ点灯の底の上に古方碑、三重塔
碑とあれ、元の桜のるるる和尚
舞ひうと、赤い

○夫婦はもめく。夫は其傍を陰ど
の嗜癖、不快、リパルジョンがあ
の仲夫婦の為に異現すると自然
夫は今点の表通を元日元の城
してゐる

○嗜癖。自分の和美を壊す。夫の為
の場。陰と陽の場色。それがactionにあ
らずして、自分はさい拙劣してカレシン
ケンをさ。楽しと色に陽して嗜癖色
ず。まはそれを変えとなれば、行為なる又
して色ふみとふまじんする。

○life

天然の色をかの説
を陰ふ自分はるの書いてもら
たあるる。さうして五ヶ月ヶ月の
帰るに うまく北れくと北れるものの色
ゆゆる。といふ為

○二人して二人の男女を男女。一人は情極、sol、
sly、white、一人はactive、social、行為五に四を当。
第為めを為られて色に淋しさを強く戦ず。
五さ、それをそう、作の美を紙の五に
めをに説。女性（実は其人をひそうに見し
るるうを考見して強情しから）が期待とする
を和強す。男強うず。七化のるるの意義
を論ず。女は無色う。白粉う。男を拙年

私いつまで。たゞ井戸端。みんな裏
長靴を一ぱいにして。たんぽぽ。村を歩く。
新しい生活やはじまる。世の果ての果ての
海の底の新しい生命を知ってゐる。
ゐるに集まる。小さい。ちくちくと
（月）

○スミスの宙返り

十月二日晴。家をぬけ七軒さがり左手（ちょと
後）の飛行場にて。飛行機やうで。也で。ゆっくりやう
にぶらぶらしてゐる。ゆっくりが。ちも。あらふい
後ろ。日新なのと土曜にゐるので。新聞でんぐ
むっくりと。ゆうと。後ろ。社員はみんな
の生に。ぶらぶらゐる。ゆっくりスミスが。青山の。
兵隊で。曲乗飛行をやっとゐるを。えらん
ゐる。ゆふは。ゆく。東京つ。四。ゆくの。祝ふを
ゆふ。見しゐゐゐの。青山。村の。一。ゆ。ゆ。
暮れ。ゆくゐる。

右の。空。ゆ。ゆ。暮つて。ゆ。の。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
うに。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
うに。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゐる。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

うと大きな弧を描いて四新しい兵機は
空に逃げるやうにやんわりと下ぶ上ゐるに
向いて。敵の地に。飛ぶ。夫婦鳥の両翼を
ひろげて。生を伸ばすやうに。又物凄をしらい
でゐるスを。ゆっくりやうに白の。ゆ。ゆ。ゆ。
去は。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
と。四新しく。ぐるり。と。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ぎゐゐ。知ゐゐやうに。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
いて。ふわりと。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
の。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
お。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
最後に。機は。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
で。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
ゆ

○ ハンケツ

The minister was held in great reverence by the Druids. It was believed that faithfully and divinely making it feel, it was given the ethrinke for centuries. It has special signification ref. in the cure of the Death, the Norse Apollo, who was killed by an arrow made from the branches. Subsequently Balder was restored to life, the minister the were placed under the care of Frigg, and from that time until it touched the earth was sacred. The mistletoe is the outcome of an old practice of the Druids. Persons of Spirit assembled under the emblems of light & good each other the kiss of love and peace in full assurance that, though it had caused Balder's death, it had lost all its power of doing harm since his restoration.

○ 子供

是迄動かぬ世界の事情。三元之兵隊、田舎宇宙流

此ごろの世界の事情の変化つゝある。桜の中に是を入れやうとしたられ、おつと思ふ。ふや天の亜鉛光線の力で生の光くらる形をつけもとらく。

○ 飛行機

山田弟の早いので紅使鉄道の磁石宮殿に見えると向ふの空に飛行機が見える。それが見えるうちに消えて来る。まもなく隣が見はずれの遠方をとして「あ、」とおつて。すると子供らしいものは子供様の恰好をして家であつて。

○ 工場。二十坪、松三百本。

○ ヤニガ工。 Smith fel Shirt

○ 五元分 工場 家屋 家賃 三円 ヒ家賃を払る。 近所 松 紙。 近所 梅 山 動物園。 木 松 木 花 家 高 松 (去体)

○ 陸。 陸。 古 表 面 陸 高 松 家 軒。 松 向 上 四 角 。 陸 つ し 高 岳 に 向 家 高 。 古 海 岸 高 。 古 家 高 軒 。 角 形 高 家 。

○半老の男　ぼとぼと長廊。

「あの人は必ず大ふまをつくね」

「そうもいえば一ぱい出ないに悲観しくすばっかりうるさ
もの。」実は大分元気がよくなつて居ぶ。
仙ぶ　ネクタイをしゃう、無暗に書物を拡
げしりするのはちと時代錯誤ぶ。」

「こんなように無味をおそれる精神が我に方じ多くなつてゐるのぶ」

「そうもいえば　あの年でとのいい、年をしてとうもつて浅
ぶちにばかり就高するのに飽きちゃいね。つまり
未丈養ってくんぶ。」

「美しめをもつて快楽とふれは笑ろしいが実を
おそれもつぶ。」

「あち快楽を奪つてるるうちにどさりと来くう
ら後だぶ」

「そりゃ他にあに教れるとういふぬをち面に
美せんとんぶらうが、体験は大いに多過つてる
る。あの元気は精神的ばかりぶやない。也現
的のもぶと来んぶ。ぶも現的な元気が精
神に及ぼしく与も大善面い」

「ようすち。何うして。」

「僕はそうは思はない。
ちとも精神的には元気をつけるにしても也
現的のは方実ぶ　ちうと思ふ」

「方がえりやる通つてる。医者は行うふうん
どんぶ。気の利いく医者ぶ僕は良ぶらう
うと思ふ。あいめと接的するのは老人を教す
んぶやない。もうまんぶ。青年には微妙な現
化用がちけれるにお通ない。血肉過剰がぬ
くまんぶらう。そうしたその血肉足剰がたの
ぬ脱の化用を起発するんぶらう」

○ Cuato m'è il sonno, e più
di essere,
Sweet is sleep to me, but sweeter still
to be a stone. — Inscription in Michael
Angelo's "Night."

○絶望と絶望

絶望は信仰である。己に迫りとおに絶
つてゐるのである。絶望は苦悩である。
絶望は研究である。行動を迫れつてもそれは
である。活動を考へるも、活動（おつて過
つて及に苦ちけうあい。猜疑である。探偵
であるぶ。ゆつの陰ぶらいのである。

。アスナラウ

「あいつは アスナラウが大嫌ひだ。あのまま逗留く居るのうちは甚アナラウが よよき〳〵生へさるのさ」

「あんな素ぶつうしたゐは ぬい茎になつて 沙稼さ」

「そうさ。左様いへばそんなものも多れたいのだしいくら アスナラウう 彼ぬに新あ男をさせさつて、彼ぬの素ぶつうしさ減ずるとも譯もないんだ。それよ アスナラウの方で一度のうあいつうぬよれとう行とうに変化して遣る方がぬだろう。あいつのあるも アスナのあるも甚方が仕合せさ」

の「新らしい芽えはおもしろい」

「新らしい芽えはおもしろい。芽葉が色々あいつこと思ひさうだおもしろい。従来が悪いのだ。新しいを見れば悪い新しい芽を張り意味の解らないものを多かれ少なかれ張り解るんだろう」

「芽生の芽えを見て解るいうものは 解らうも大で ●も ●解は異解りさ」

はは芽は二つとも論理を ●誤れり。一は解るべきアーメンガを有つてゐる上で解らないとゐ移論を出、一は解らないとゐ移論を出。二つの移論●方向は異なる。どうゐ新らの解らないと出意味し移者の解 ●ことゐ意味とは実引蜂りをつてゐるい解らないとゐるのをつて 移論ゐつも解つてゐるいだ。

解らないとも解つてゐるいだ。

。歯石、埋石、一見は"笑顔中にある石所為"が歯根に沈着するもの。此歯石が歯茎を侵する結果、いびきが段々低くなるに伴って歯ぶみを来たす。さうしたにがきうがしづ、ぶ、ぶ。

歯の長さの三分の二は歯茎の中に埋っている。

。石。　それは歯の根に着くもの。どうしても上の方に沈着しやすいものとは思はれない。どうも口腔中で出来たものとは云はれない。有ったとしたらいくらで、あると思ってもよいとおっしゃる。無いと思ってもないと云ってもあっさりする。

。。。。モデリング を取って今まで石膏で歯型を拵らへ。その生きる即ち歯のおけさ即ちの性格に応じて適当なる形で入歯を作る。

。「あの人はあんな所へ行くと性格をしてゐる」

「なるほど一度出てみる」

「えりや地味なものを着ることぶさ」

「着物の柄をばうちゆうすると。あの柳ぶさうえびす。ぐうるる後ろ姿のひ」

「えりやりかりの着物のうを着れさるるぶさ」

「ぶってりかりぶるる柄（こよりちゆうすえう）」

「送掛やぬ色は青さ。けれどもそれを拵おって迎ってみないんぶ」

「送掛やぬ色がありどうしてそれを着ますまする」

「えれさ。送掛やぬ色は着物にあるんで着る人に合ってのみやさいのぶうんの物をえて自分の着物と美人の着物とを比較しないのさ。即ち彼対我の優劣を比中に置いてみないのさ。人を許れくるみ物さいすにるるぶさ」

○男は女、女は男を愛します。さうしてそれを人間のせしめ作るに力はつくを要ず。

自分に充分でさうして自分の有つてゐるいものを他に与へ見ますが為にまたに愛まること。ねばに自分にまたして他にあるものはえ果自分と性格を異にしてゐるために衝突を生ずるもの。コンプレックスとしてを他を抱擁さんとするものはアイデンチカルなるがために又他を排斥するもの。

故に他はれ引き又た強く。えらくまん性をおそれまんが強く共鳴をも発ずるべきもの。

○我一人。あの美の

「私はえんぜ家のるい人は嫌です。なぜ一人をゆるしんぜれ人でもそうでは」

「外の人は全く美せずに自分丈に善の景を集めやうもいいのですね」

「そうです」

「すると其男に対して皆めれば。女はみ

じめでもさう。ですか」

「えゝ」

「何うしてそれがいまます」

「完全の美はえんぜさうでせう。其男は[illegible]の美をいふ女を求ずる為ひの美いふ女あるまいんこの」

「私しをへてりぜんちゃ。あるさはおの女を女と思はないで、あるさ丈を女と思ふとしてるは男は男性でも性格でもいい所へ出るようでせうの」

「男性の上でも美こそやうなんか」

「女しあるさまを女と思ふとの[illegible]と解いはらかるおんなが女の女を女と思ふもいふと云ふ。女の女を女と思ふるさうです。何とそれとも女の女を女と思ふるさも陽もの所の美あるさへ女と思へる花がいいです。[illegible]の美の美が花でおのあの花は花のやあい花美ごとをうとねのはいる」

「花をよべいこのあるまんの」

「花をてそ後がいんいすこの。夫をうこのあるさ女も嫌ふ女もあり、甘ゆるさめいも嫌ふ女のあって美、美味を有つてゐる花でのあり中で一番あるこのあるさ女にれてこそ美めは外者に美しんとのるしでや嫌ふまんの。花ゆるさ

「あいつは性根がないから。何[illegible]にしても
無力だろうと思う。[illegible]」

○他の母上を見ると、無学に他人には
性を出じ、学問を通じ、世間通の者らい
べ来り的、既に学生にき、施しや金を
貸しくらいをする。

○何うして善いと思うんだろう。
「七円があるんだろう」
「……」
「明日の夕方よりさ」
「お嬢に金をやって稼がせんとが」
「稼ってる位なら、おいら遊ぶのさ」
「遊び職を探かれっぱなし」
「なら、ないか金のかがあいに稼ってみさ」
「べも無いもんせう」
「色の女の来て金を借りるより稼ぎさ
らし」

○爆発する性格富士

○江戸の古い地所売、はは相場
の安にまるのあるもしも。
名古屋に来に入ってきまるばつ言葉
とする狂おきもの。地所ばつ言葉
安とおきしや。明治安と云ふ安
安生せの江戸の伝言あるを安定
りの言をうきしれ人昔地四時のために
江戸の二字をかへ伝言をかへば江戸
四時江戸安と称くとふ。江戸屋と
ふけ江戸ものに言きしで、地の方
でまいとしらが、あり会せの成るで焼
ぎと第の言ものうちにまいと共ひしや。
大和義地を横に地ぎくるめ行は
しき、地と言きる方がなって本物の
地を知とふ。彼の酒をおしの飲
まぬ新に酒をもれると言を言きしや。
酒をくんで言きしや。
四時に言四。ぶる時の江戸安。言葉と江戸
に言ふる安にしのとと言ふ

夫を思(ふ)。夫らも人のふたりきつけやしとす。夫はそれの身につく。大しくはき出せ
ねば。四肢は人々千びとを恨む
。人の。まるちつて[illegible]
い人の他の愛に[illegible]
。いかに[illegible]
。[illegible]
。[illegible]
[illegible]
[illegible]

○コンプレート

人に目遣いをしようとする様子を見せまいとして
おれにやりたくないらう、おれは知せざらうと、
ふ、変をするものは、[redacted]その目遣や様子に動う
される男をも悩者と云って笑ふ。[redacted]おし
自分をも悩は全く棚に上げてゐる。

○臆病

人が自分を馬鹿にしやしないか、悪評しないか
男って奴程不あの無まで弱さのは臆病
臆病もその、又は弱みものである。
おしまく人は動うまいく。—
「己は臆病でもおりたい。意地ッ張りでもおりたい。
おしい正しいつぐ。正しいものとして正しく
ふものを打ち倒さうとするのぐ。おまく他
を捕みものを嫉むぐ、さんまもうは どうして
打ち撃らさちれはあらあいとふ事がむら
くと思いて、そのことをあ あるのである。
この様なるふうは 川雪や 探偵の 恐を
四のやうにして 以 を 嫉 を 捕やう
と一生懸命に 来 を 造 ってゐるやうなもの
ぐ。

○甲 芸者のこのようなるうず。
ふ婦人のとなりをなる。あるうれ
に 彩色。あはしを 情とすかどしゆ的
に 相 に おして 嫉妬の 念を 抱ぶ 孤
ぱぐ。

○ 手 ま 拭 すに 拭らず 手 は 日 平 ぱ す。
正 版 ・ 加 ・ 三 公 版 単 美 く 版 評 。 村
料 と る 。 ま に 嫉 妬 。 ま は ま う 。 あ ま を
反 人 。 た に 色 ち ま い ま 性 を 嫉 ら す 。
性 う ま の 怨 ま 嫉 妬 的 ま す 。 あ ぱ ま
し て 生 を 自 性 反 性 ま る 。 あ を て ま ぐ
す 的 主 ら ね 男 を ま す 。

○ 嫉妬性 おし 新 生 を 生 て ま 夫 が (ぱ て
男 他 の 婦 人 と 色 ふ 。 主 嫉 妬 は 美 と 自
分 の 沼 男 の 為 て ま ま い ま せ 。 美 く お 夫
の 夫 美 ま ら は と ま ら ふ 様 に 思 ま し 。 を 一 節 。
知 夫 は 夫 の 為 に は 嫉 し て 嫉 妬 を 注 ま ま ～

○三月十六日。松村の分載をもらふ。カレ松ふ書い
葉が見ふ為紙をでいとる。それく後仕へ出くし
ひきがんく書味のおを拾く。

○ Suffrage-right
Peaceful walking
Liquid
poem

人の come-to-life ならば
自然ところ、人の動作まで、おらいなるまい
事ナリ。自己に自然の無き

○ トルストイのアンナ・カレニナを
メリ子(一七歳)にすすめる。
錦に花柳のあつた一人くらに静かやうと思
ひれる

○ 二月一、炎熱、山王、荷物、荷造、
出行にその分類をする。の故会

○ 四月一。火曜

「生きてゐると如何ほどあつて一所にまはる
ものぞ、一所にまるいといふ事時をせうう」
「すると私ども一所にまるとも行先の話を
が何ぞうにそこにならうあいでせうし
いえ、さうすると今知り出世界を回遊
まるめでさうう」

○ 十 あるひを思ひて其ひを実現せず
にある。他り他に向つて研究ニテ思ふ
ふうを考へてゐるはあ、」彼は実行も
ずるは出来ないと日本と考へさうる。
おくとも他に対して主張主張研究
にをそるると考へさうる。さうしておし出
世界を感じさうう。

○ 高生と思つてある。世ようにとうこう。
其高生と男かんの取り付いてどうし
も其仕方に一生懸命にをれぬ。わか
ぴはそ結一生懸命にをうとするのにと
つくく口惜しくなる。他に言しらんとおもの
成ひしくとう激動を変化に為をおしさう
といふのは此心発ふとみた大愛のす
である。それはまず他に男因のある
ざうう。それを研究せずして生時に
まれば考察すると思つてを生めわが
えらくをうとすると思ふのは思さまる。

・A・Bの二ケ月ニ対する感を話そうが思かの。又は其長性を話わ。ことフーテーションをやる。（Bに実の付くやうに。）B嬢姉を訪ず。兄弟・姉妹。A・Bをぶくす。Bも兵野校長としんとふせしひやかす。Aこれをえびく。そしてうみはらが病状を知。

七月。土曜　A・Bに心をかくかける。用紙に和紙であつてうをもかうかける。

○

Aの家。面白日は大曜。夕晩Bノ来訪お後ろのでお姉をおつてくる。Bはもちろんいなかのあへらくとまつてもいるのだそうである。

四月二十六日のある晩。C氏来る。此晩は新聞しんぶん。つまらないものばかり。

家に寄る。

「Aのうへうつくら旅りでゐやでしてふ奏しく」

B。夕方　芝右駅をして日く「おうちAのあつうくとおくつですよ」

「ぜんBさんはAのろうやろうせんでしてよ。Aは旅りでネエちのですから」

「へえ」

○一日のあや（大正三年三月十二）

電報。　廣田和生宣元（上海発電）

（ロイテル）

×結婚仮清式和者を陸軍部男にきめることいふ話。陸兵男の表現。政府報告の結婚式に及ぼす影響につき。一年二ヶ月後の平安を希望する。結婚上の大事件を意味するものなる。

×英語ゴロの高級を頼々脱構する事いろ解決の。（姉兄は組上の一――

以上　年　月　日

通後まと一項ふ一項ふ一日ごあし長つこうて。後ろの方はあ色もの注意ましくみと思ふさしと男性様に切目ごまこさしこまれぬ。

家他の面いまといつくら考ると大変ゆみである。本通田のあいの大の美加を注目しなければ「主でなかろ、つくらう」と思ふ。

○場主のしつ注了。以外にあり

空を忘れんばかり
「まうまと共方も一緒に言ひ出さうと
思ふ」
「何うして」
「まづ アナタのお後の まづ ばかり」
「お後ばかりか 全くさうなんだあんなもの」
「然しあなたはその一人ぼっちで」
「どうせ僕の。僕のようなものつまらない人の
の嫁は 祖母ばかりあるもの。」
「祖母ばかりあるもの。そうなる人に。」
「どうぞ僕をあなたのようにとなる。」
○夏の夜の話
「私はそれを忘れました。」
「ものはどうしてもめを伝ひうるの事
なくなるのです。」
実をそこにレーデーが後を突ふ話
「私はそれを世ふものまして。」
「ものの方ばりめを伝ひる事ばかり悪
ん」
○人は誰もあとの自分とは(ます)思
へます。しかるに自分を知ってゐるのは。
先は白と黒とのまんが時のうちに時代し
ってゐて、白とかはねのとなりの、又黒とい
ふのは黒のとなりの一つものを明らと後を
まこうとします。
○ポセフコヨ
「私はいくらめを見しても一生後にこの(を)
お望にかうのいうとです」
「何な」
「世の自分で自分の所為しかあるこの事の
ひます」
「ちゃめは後の方しかあります」
「現時のめは全大の所為をせう。のを
れ夫はすう現めてるとせう」
「さうです」
「時時のめは本現の所為にせう。のく
ともあはすう現めてるこせう。父母許
後のをこあけのくめはまもあるいの
らです」
○肝つ プレートフフうづの時と
○Aとあせとのとあ男

（A+B）の天仁はかあるにのまに立ち
（A+C）の天仁は四角にかつさ立ち
山がBより四角（A+C）の天仁。
すべいにつと考うく。さうして大きなと思ふ式
がは推高がすくるる実と同じとのにまて喫驚
心を起す。多は推高のさう仁うを知つて
ふる富の会を起す。或はふつふ元に低。

○横れ仲るの前へもこは
　山神仁うの人の芸術
　山神横れい人の芸術

○二人の支立が入し抵に広ふ。苦しなつ山なの
　ふまを抵しあか。「おいつは行うしさ。宮田」の
　ふを抵しあか。「あの山に行うぞく」

○プレートにクラウヴ。

A. 僕はあの女に恋してゃ。プレートにクラウ
　ヴを有つてゐる丈。

B. ぜゆす矢ひ方をする。けいみのゆさを
　ふをするふを知つて居るのだ。

A はそれに来がけいとの答をいう様に頷く
　言を湖する

B 苦悩はほぶの様のようにあるふを知う

ばけて、「いくらB人が左右婦表ふをは
　矢で言うこうて、仏国が心身おいといけ
B 国自を抵ける。抵はきの芸におしこゆ
　ふをもさおいうぞしふ。さうして他の女に恋し
　肉の感じをもしさル。ある人の女（ルもにはる
　。美しさる）におしこうみは全く其抵ふ物を
　しーれのすとあすを抵ける
○ 巴の抵け和ふへ見る様ぞ
○

「実は いしかの様ちものと強うこってきし
　ね。つまり一言は誰でも最ら好ふは国を
　おいのでせう」
「いしかおら一言こうきりで居ちけども実は
　さうはいきません。二言でも三言でも言り
　ますぞね。Kさは私の知うこう大ふも思う
　五六通出つさまよ」
「まあ言ふるいう。おしなさの芸は一ぞに言
　しのおいんちかおいもをう。私の知うこう人に
　ぬきちんと一ぞにふもおいのに物をふる人
　がありますよ」
「でんちうはまは白ふるおいんをう。記憶は国

私は非常に嬉しさ。私は必ず他に別行動を
ふることを期待するのであるが、此の話を打ち明
しまけうと決心しました。それでは人のうはさう
きくすいと思ひます。然し私の前の前で模様
変色の人の嫌くとまると、其他ちゐの話を
見おければ良いのであるを見ると強ど附
へられに来るのです。おしかを思んでも強
を求めようとしたと、今近のうを取ってなくては
好都合の事なしないが取ってるうと云ふ事
事。私は又人を数って此に行くのがつらくて
ちょっとです。

○彫刻　彫刻

(イ)　私が強取ったと
(ロ)　変化の文吹としてウンザリ云う
(ハ)　口に話が出て、拉って云ふ
夫で(ホ)自由、(ヘ)イラ狂、手紙をあ、ー紙画
は一番をいいと。どうマチ子ち紙画は(ム)先
がカ(メ)ッ(モ)ポ(ヤ)ス(ユ)ものがうい。其れ中は
ぬナレドを此手中位の右手を出スカ
ジャナイダラウカ、老人は此を別の音南カ

脚ッ子カ中ふ、ぶらうの。画の中手を名乗
美ッ子ちいまくるかやるんだらうの。(カ
ラ)テリヤウを表現する(ル)代の絵画ノ有
ッもは多といわ美でも出ってるが。だうが其
画の中手とは何ものとおれんかと思う。
つまり先に絵ッくもの中美(うき)とおって
ねじで、白光、と入る([illegible]作品が無ま
ひえる。五月(で完成す)を変すると云来
ふが取も立ずに先を変す来ふ方やおいど
らうの。
すぐ中絵や御名の彫刻の強取せに行るし
絵に(ル)立ちまち其方に又入る方いやま
ちが出てる。人に変めるくる。人と競争
しくくる。仕事を山カ力は手強ふ和彫
を知ってるが美化せ出しの交関にもと
先ッ作ポクテー仕ッとりウテ・ボタくし
ると、座敷がうケデ仕方がナラ。
○AとBの実体。第3 美ら 美の彫
堂ら第3内
AとCとの実体。二人が第3美ら方色
ういに涼しっ(ル)が行ら立ガスライト・ブラ
インテンス。光し内部にインスタンタニオス

大分久敷私山家生活を共わるにまつて彼とおひ
ゐらす許りの世の富さを有る度毎に人生やうに
ゐりまして。必ず其富さへ其所いらく新も
と思いまして何のしあしく。
私は為初ふ不幸を信じてゐました。也ふる決
とおもふても何でも其人を疑ふうが出来さうなこの
べます。然しこんな事実を明瞭に見ることしても疑
はずにはゐられさうです。私の知つる人で若いうち
に迷を犯して今は立派一人前になる者を目て、夢
して居る人があります。其人は今年三十二ばかりです
がこの年下の男と密通をつけた。男は高等学校
を卒業して法政へ在籍しまして何うしても一所にな
ることはないのです。そこの人が自分の境遇を
推して、私に「あなたはあの人にあれ程踏みば
けられて悔しくも何とも思はないのですか」と言ひます。
私は口惜しがる筋に思して男がさう短気なこと。の
を見て殺りまれば、ぐらいです。也ふ見れば
きう実と見ることもおもしろいが私は一旦信じて
をどうしてもさうやすいと思ひ込む程に
ないのです。そんなことがあいとばかり思ひこまるのです。
女は此めの人に私をやつてくるのあつます。其
女はこんな考はのまいてちのです。
「私は其時殺をしなければならなくなつて……」
女は此のように私に問ふやうにとおつて
来ました。私は元せは悪くあるまいとも思ふが又
私に決心させる手段をもちることを言つて女はわざく
其の為を私に送つて来たのです。私は男が
何処をこんなことを女にまつてやつくれのでさうして疑
ありのです。事情私が厨にあつくのの、夫とも私
に早くあきらめさせて他へ嫁に行くをやうと思
あるのです。それが私のために悲しく感じるのです。
女は又女と私のために悲しく感じるのです。
「雪ちゃん結主仏なのはあいと思ひます」
「そんなに何故其事をしかたくないのです」
「私は其の後任がないのです。私はやくざかるる
のですから」
此を彼の男と彼の女を待つこのでせうか。彼
つまんなくなる彼の其心の事。私はどう解釈しても
いいのでせうか。私は保証しました。母は私を引き
出さあるのこの方へ行つてこの方へ死なるまと言ふて実
ります。然し私の物おを見て飯粒に成ると
見えて父に多を出せます。「雪ちゃんのようは引き
出すと彼の方の人が今のように田舎へ行きい
の方のと言ふ②ひおいうをいかやうでは男ふ」
父が私を見て言きました。今ふ又何う如何を見
るとう何とうこはずに（どうの）大人しくしと言母
さんやゆきさんのいふ通りにおつてくれとおひます。

それぞれの考えを解らせたいのです。もしかすると
一あのような性格は男性にもって私達によくおとなしい
と。彼の父は気弱な男としてみるものもあり
来客と長人で和室を広い中に見ないやうな性
格であつたのでとうく彼をしてしまうきしたれに
ある強まりつゝ事あへもしるのであります。でも
一あはやまの見ぶりうるさくくるまし
しい。ちゃんと見は他兵ッ子村ばかりの家族があ
るのでしょう。とても特徴できる多数の世代をまた
強まりうふいうので、ちゃんと何を言ってもいました。
あにきを好ず弟の矢まで出家場を経験した
しました。ちゃんとそれがまるでまるで見ないようにも
なして音書いたりするのは不公平ぶる行方う
思めうと其弟子は考えれるために弟に私と対照した其
家を教つて来ましたとまつくのです。ちゃんは思うました。
実のるにお時を強いるさんを苦ぐしい仕事がと
まつて喧嘩をしいさうです。もし彼は無を為立
弟子の姉妹の世話にまつてばうえを考えるつ
めを行うを考しいえんので自ぶもん苦しいう。
さうです。
べ兄ぶの対談まるのしないうとゆ教私の
三日前にまつて、彼は兄いのつて思仕の会

はいくらかいぶつて出来ないうはないと考地
づくで見いに仕立しいえんべ私に考ひに来るのど
すうです。ちゃんどうしてそれ私ちゃんがちひせ
ちゃうつもものと見えて既つてみるもつと思はん
ます。彼は同じ所内の多人に面の教育を張
しいさうです。其人は多を飯しいを（来ました
ぶを修父が不在どつるので見に仕をしまれば
ぶちゃうつもの。まると兄は学面の仕事と兄て
好いか城に（思の教者ます）
あしらつて直しいしひまし。
えんまうで私の時間は破れつ。私に多数の見
弟の多に兄つて父母に以前を考えるのでまるまる
ひし。（兄は嫁を出（まりかばうまん）えで
模倣契の長母をさうつて しばらく身を思うま
うに私しました。正母はめ国です。すると考
ういくのは本分の仕事のうちの模倣契（明治
大典）祝にうつて、ひとつり長母の宅へ訪問に
来ようです。彼は私を見て今正のう仕の表
じては何もないもんでしょう。ゆえ祝す様子も
おうつくのです。私は考慮婚ごの不めごのが
たまを考えますが私と本分との男仕に私いと考数
を考つてみるものは（人もありませんゝゝ兄弟のや
うなる様とのみ考つてるるやうでしょう。
思うちゃんの様子が兄にまりましょう。一人で動ちを
でが長をを教つて仕ぶ立の場に無こるこしです。

うへ参りましたのです。御手紙をもらいましたが
まとまりましたらあなたの方へ知らせるようにとの
御手紙の文面もありましたのです。

其日男のみはちゃんとやします。丈夫なのは
嬉しいが私の考へのうちは（四つ）ばかりで私の
兄弟達は私をば之者のやうにして居らしゝ
しく嬉しいものですが、宇都宮に居る頃の
私に出を知らせて呉れましたとゝろを申し
しまゝ。私は嬉しくきゝました其頃は十七歳
になりましたのでおしは男盛りの時きましまう
其頃を御覧について考へました。えらのみと私の父
とは利発性快活が一向なしきせしこゝろそはえ（ゆつて
ゐるんゝまいと思ひましてこちらを多人に笑（ひます。
私は男人を主人様の人ごと伝じとおしき紀
つてたりませんでゝ。

其時分の思ひの仙境に及第して少社にゝ
ゝ。それゝゝ私の叔母を通して私と貴さいとゝ
を通にしゝ。私は異存ないませんでしゝ。丈夫
の丈夫を知きしゝ。それで時分が第五記（ま）
ゝ。それもう時分まるとゝろに（時分を）しで来
ましゝ。

まゝ丈夫の叔母に向つて好時分を第五記一度
私と二人ぎりで考へしゝと申し上げました。
叔母はそれは貴様が考へるようと申して断りました。
東京は汽に乗い生けゝ女へどゝ二人ぎりゝ自の
ゝ汽で決してお私の考へ方とそれ決しました。
それで叔母もしもそれ考へして私と丈夫とを私の
家の二階で考へさせるようにしました。
此に私は考へるのもうは書物の彼の[illegible]
丈夫は私に向つて何ん申しません。ゝゝ考へる
ようです。それゝゝ口へ出しゝ怪ゝばゝの言葉を
又私を考へるゝ考へゝゝ知つて私をゝ義ゝせ
ましゝ。又私を不快にしましゝ。彼は私に向つて新
うゝゝましゝ。
「考へるのは私をどの方へくゝようゝ もつとえ
ゝ人ゝ方へ行つゝ方が好ゝはないの」
丈夫は五ゝ男とゝふのは私の叔母にあゝゝ
る丈夫の方をいふのであります。自ゝでそれ私
を考へゝいと申しゝ至さゝゝゝ。ゝしゝ自ゝの
るゝ通り私をもらふとゝふゝにゝを極めゝ考き
ゝゝゝ。今丈の時にあゝつゝ、考へゝ立ゝ考へを
考考の夫ゝゝ様ゝゝそれゝゝは私も考へゝ見ゝ
断りませんでしゝ。

彼はゝゝいゝゝゝゝ決ゝで考を立ゝましゝ。ゝゝ
ゝ。ゝゝ考へゝ考へゝ一ゝ自ゝの考へ言ゝゝゝ
すぐ自ゝの叔母様の考へに向つゝ立つゝしまゝゝ
のです。ゝゝしゝゝ夫ゝゝとゝゝきゝは好時についゝど
ゝいゝゝ考へゝの一向考へを考めゝゝれゝいゝゝ。

品つは詩化されたばかり方向に向つて行くべきものであるに、うく又は第三、第四は芸術的意味に多く接さうが第一となる事にならう。

芸術的とはたゞみに美を追ふことを指すとふ意味。自己に向心さうとふことは芸術の場合も同じ筈べきに、ともすれば芸術の場合は同じ筋にならずに、ともすれば自己を人に強要する傾向にしと見るべきならず（純粋的自己にと）第四作家を作者（作）。もしとは自己のお宮様発るしまりなきものを相手とあせる様子を出すと見るべきならず。（此の点は多くの人がはしくんばと他に実を指ぶべき道）真を示ざる私たちの自己の位を見るべきに人像まんとうと

○あを飲むかうとは思つまれ

第一行目の次　大変なく
次に　　未だおそくまで一年生をとる
　　多分に変る

○

私はKさんと同じ位年でいる様を感じます。Mさんとは違つた位年です。Mさんと

●一緒に行つてのがやはいんですつうね。もとくそれで行つしとしとのです。Kさんとは親しいのMさんとは親しくないもとそれでもの。親とちゃんとあまい知らないんです。向ひ合つて話してさへ分れば考方は親しいと思うんでもう。もしお分け談れてゐるうちには知らうとしても親しいものはありません。心は非常で陣とる様子さまいんくじんくまいつて行けます。口を知うないとも思ふ面の話が出ます。

○独身生活の話

私は下野と云うものでいます。家は貧乏家であります。兵隊に男の様の生活は無理なんか考いません。兄弟は十三人で大変大勢ですが父が亡くなれば私の他を数うるとはまらないが日に陥つてゐつてゐります。

私は宇宙の真の女なのを信仰にそうきく。それ私の世界の性質に当るを信ずにしの中まにそうまく。これはもとさいの中まにそうしくお年寄るのにまるそれを見快をあるを強にいつのようくので宇宙のえんか

人形のやうな足袋は勇ましい拵えで世にあるとも
思はれるつくる。拵えは一つ掴んで紙の上を投げると
男女に其人の姿をつうと、次々と其
を掴へるとりつ〜にあと五人に立ちつつ
仕方ない十枚の拵では形ちづくれない拵のまま
拵のまつをまぶと、一枚、二枚、三枚、四つ分に離れ
ていく。とうとう七枚の拵で宝石に取り囲まれ
て残るのは一つ。紙の上はもう水とすんだ
ようである。紙中の男は拵のけへ探いにげる。
ブリは仕方なく一つ男つて人をうつ〜ぶやく
えまない。紙のもももももももももしまいに青い
拵のやうなものが堂の中を飛ちつく。
ブリは三尾しの形ちをうつく。
「おそは飯を食つぶ。うゝ、ちはどうする」
紙の中でたんをうつく拵ひのそる。
夜色は深くもう寒へ行くほどけるらしく
遠くは又ほのぼのと明るします。大ぜい。夜明
つの拵ひをつけてあまるる。拵ひはほる。
拵堂の夜明の所の下い拵拵を切ちる。
……
「あのえ紙へ移るほか、紙ひの拵の者
つぼれてうるとのはあいよ」と言つて、紙や
ぎようとしまし〜。ぶまちゆ」の考しきやしまい
うと思つて。あくとあなたを後の拵まみまぶ
山」
身体のぼれとろ〜ろちゆれは考い後さして
男の拵の中に寄てる。紙ひのまるまを続いるの
拵えまろ〜ろ〜ろ。えは後もおらえうつ〜。文拵に
ろうを訳ねたうつ〜。拵しちづりは三尾と拵
ようつ〜。

贅沢

(一) 贅沢は上。　浅く未だ浅しくふる。紙の紙を
表ぼせ〜ものが心にあるはかしも贅沢は浅一
ふくふる。それが言じると年寄いぬ。と四十さの
は点に住のにがる。人に之を結して白といいき
も之で水素である。
(二) 無実上。贅沢の拵を同じ。老人は之
をよくしはが。当人も成つべく之を使さうとする。
「是ようを知や田舎のみが現在を」
(三) 人るのぬ者の上、之も同じう。さうして評論は
(二)と同じ
(四) 精神的、体に於ては浅いろ、之も二の
加減と同じ

「おらせると出られるかいしらん」
「おにゆるのまとば出ります。疲れてみたる様
まんなか。大きな声をだして呼ばせる為あげます」
「さうして人が翌日でも来ないとすると、みんなとりに来
つて来る筈だ」
「いえ、あれは日だけこちらでなかに舟はあすこに
るのです」
[illegible]は[illegible]へ舟ばり出せられるのである。
「あすこへ行つて無せと言のまをう」
舟頭は舟を[illegible]へ漕ぎ出す。
「うちの[illegible]きんどめし無せと言せて伊豆さん」
舟とはせの陸に一国とちつて[illegible]入つく。[illegible]
くらいのでなつてゐる。風をねむつてゐる。動く舟
と陸を[illegible]と[illegible]おの[illegible]ゐる。
炉が知つあつてきて[illegible]流うが[illegible]を[illegible]紙に十[illegible]
ばうり[illegible]して[illegible]は[illegible]えこの[illegible]に煙おつて・[illegible]
胴が[illegible]の[illegible]を[illegible]つて来た。[illegible][illegible]
に[illegible]べらみて[illegible]は[illegible]を[illegible]せしく[illegible]
[illegible]に一[illegible]を[illegible]ある[illegible]
[illegible]ている。[illegible]其[illegible]に[illegible]
[illegible]くして[illegible]に[illegible]
[illegible]立て。

あつて。呪法の[illegible]ようなもの。
みんな[illegible]を[illegible]せして。
おかげで[illegible]は[illegible]ている。
の[illegible]して[illegible]に十二[illegible]の[illegible]が[illegible]ている。[illegible]
の[illegible]の[illegible]を[illegible]ている。やがて[illegible]
[illegible][illegible]下げ[illegible]し[illegible]。一[illegible]に十人と[illegible]ている三[illegible]
●人の[illegible]牛ぐらい[illegible]の手の人形の様に[illegible]
[illegible][illegible]する。[illegible]に[illegible]
で[illegible]（●赤[illegible]もの）と[illegible]い[illegible]と[illegible]手と[illegible]形
の様●[illegible]動を[illegible]。[illegible]
して[illegible]を[illegible]。（又[illegible]の[illegible]）
一[illegible]の[illegible]を[illegible]。[illegible]の
[illegible][illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]。[illegible]に[illegible]
[illegible]。[illegible]に[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。

うらくらい。其古寺の上に鳥ゐ居山ゐる
る。所をのやうな音をあげてやうおもをして
ゐる。
「あゞぬ」
「暗さ」
「ばあ行ざう性なゞ通おうお」
「中の暗ざゐ海のと仏田山ゐとなを立る」
其うくちは低く鳴んゞ。
「成程あしてあおゐをとゐゐとゐるさ
暗ば」
中は紙ゐ居山見えゐ。
「先ゐ十一結たます。まゐで十四五人を集
つてゐるんでます。悪い二ゐ人をとゐる。
夜ゐ多い七万位づりのうゐるでます。まあ
十万位とゐ金ぼるんです。一人西ゐ一枚
に二十とゐ二十とゐゐを焼にしますが
きゐを先ち飲んでいます」
「それゐ仏ゐ死ゐ死んぬ」
紙はあゐ陣を重いてほいてゐる仏の巻。
やうもの一所に長ゐ多侍を通り拡げん
連ゐええ浜松の一ついついく。紙ゐ
ゐ片仏に巻けてゐる其中ゐ衣をもしく。浜夫
ゐ二三人きとの紙の女を見て行とゐ移
ゐいゐるつく。ゐゐは天ってゐる。やゐて紙ゐ
其の仏仏へと十四五人ゐてやゐ
国まゐるくゐ起きゐるもの主つも主って
み巻もの。新ゐと一ゐ先の紙を見てみゐ
さに法動し始めく。
「仏は仏ゐ紙ゐ仏ゐんです」
「まあ四ゐ仏ゐゐ」
仏に三ゐ主ゐ。芸べゐは性仏のない主
ゐ四ゐ
「歌右衛門に似てゐる。ゐ人はのいい男
ゐ」と巻田の巻ゐは若いしゐしまりに歌右
衛門と言ゐゐを抜ゐゐけゐ。此歌右衛
門は四十代の主仏ゐ男ゐ。「紅ゐゐ司会右衛ゐ」
と言ゐゐ。ゐゐ州の頭に後ゐ鉄老をしてゐく。
「紙は日に大越田田住やります。浜主新は十二
月一ゐ二月位とです。中田ゐ（　　）の紙
本の新紙です。紙の浜は表方ここ七十四ゐ」
仏ゐの紙に格ゐあって其上に人ゐ一人主ってゐる。
「あゐは人張りです」
「え、奥ゐ多のつくるとあすとゐ大きゐすを出し
こみそちん表ゐ紙ゐのこゐ」

弟丈は何ぞうなされ顔。わさと侯おうそれ来
さやうちんおである。（ふは女婦に殺しやのおいが）
甚だつまらぬ。どうが政伯に知つてあるの「えまう
にも何と祖とふあるのう出」
おし行くとおいに書まと為格を出を
めらしい程出ちあるやで三三人の女のうい言
まがする。
後は三方陣で居婦がくに北が色で上へいる
る。静のおわさん浮で使う飯まれ一方のみ地
にいさ上げられ桂が美でる。れ間は強い
をしてるが続のやうに桂そもあつく。あ
の山の坂上が先刻の手紙重任の桂うえ
「まれは海でのぞう」と刻男いのけちく祭い
紙で北兵に四五人捕らまつて
伯へ呼つて給と名れ。やおはもう一人で初を
おふ坂いて言を四つ上に並べてる。わさんが
紙は出で色べつべきれのど。さしてるもを
ちそつちやちでよいとまつて、ひめに井に時を一
おもらつて其中に紙をほうしん。そよをむ
色が紙めく。（祝めはまんがくめに男性せいら
ひしらしさうである）
「そうらづり紙を見にいくんど。ぼさんを」れ

一方にちきまい
ぼさんは多分桂坂で寄ぼ（ぼ）ひにちて
ます。
「ぼちはるがかをそうの」
「ひに名かさん」
あさんは遅見しようがられづり紙がえりうきい
ので一方にちつて又後ぼる。
英さをと和国をおつてまく二方のひめを二人紙に
書る。長さはが左の紙を主て、陣どる。
はちく海は平うぶがはあがかあ。ごうきい。
太外は石山がきる。
「ぼちは後望さんのおつてつひとる」
「あの流桂がおつてえんざか桂ちすはわえ」
「何でもおすをえ紙にしてやとす為来で
おものもりも多ひし考つくんひすが。一向居紙
えのつきさうもないひすね」
「あいつのうぶ。ひえをやりせして伯ちまを
ぐらう」
山のはづれ遅紙が来る。まると大きおの面に
九方をほうしくやうわり桂ぶうほぐぶず
つ考えで見える。そ山は桂別ひしくる陣を
置いてある性形に紙別まてうるえおけら
ず芸性彩の所ひるうは書わ見えゆ一寸
ひく多い。どてえ伯まぬつて伯まで紙つて多

一山越えて峠で「往復」を降りる。寺野（行くのはすぐ右に折れて田辺のほうへ出るつもりである。向こうもそろそろ暮らしい。紅葉を見つつ）の桜おやそろそろ出ると（もうしばらく）此の者ども（に）ほしい行って男が多い。

「ちょっと待ってください。里程を聞きたい」

「何もさう奉実を見はさくってもよさそうなものだ」と男共が騒いでいるのだ。

右は粗末井でわるくあってみる。下は三三の如岸で下は曲でる。口元にちょっとる田舎流は面白どけでくすやくする。女達はおらせいる。井おの老田のばあさんの手拭を奪ってやる。田やごやさんに扶を（微）貸してやる。きょうの主役を演じてるまちゃんはむもチャン掘ってる。

「流石にちゃん」

「ちょっとやめ」

「よっこんさん」

ちゃちゃんは赤手としてる。

「早くえへってあるをふる」と出のとしたやっぱ」

男はどんどん歩いて。

まうが右手者さ坂にあって。木を曲って又下りると人家のすぐ近くに見える。（曲）五曲ると久ぶはれあにちょう～。

「手（曲）井をとゆ者をはの方ゆ」

長くふく浜中での弱まん、

「ずっとこっち左側だ。茶がトタンでちょうの茶あすすめ…」

手本の二階へ通る。

七面鳥の声を聞いてみる。鶏の鳴をつい。

「ホーホー」を海と墓地で英こちゃん。ちゃんぶら馬鹿の鶏をおれをちゃうおってまい」（鶏）

「へい」

「おいすあるよ（曲）。えれ（曲）やっぱえぶ郷の元えにあっぷ、元もあるんどうう」

「いいえいすす」

「おりをまの地おってまい。此方で焼いたもんもんぐ。」

鶏の主人の心来る男達へ出える。狭い道はえおれのあいとる。そまの方へ元出の如ぶ者いとる。さうして（成功）成功もする。ふふふまを格に実いとるつもる。大くえ丈で異えである。

三味線の撥でみの中をかくすのでみが怒る。
どうするえ出来ちがつてるぞ。あり事（花物を云つた）。言葉が通じないので牛乳屋にかつて言うあの婆さをしたし。けれども二十五年を迄生きたんだんだ所おれはおつまんとあつて小伝、教者とおけばいいあるまつ
千太郎とあのは阪ぬを伝えたあいつ
「一人来る様は二人が淋しい二人見る夢（八）」
此五月の解放が二回りするんだよ。

○豊田のばいあ日く。君は生を楽にしたものです。彼の本業ばかり出つて、親切の仁を深くとうえ
大でまえ、歯のあるトルを宝くのです。

○車夫
「川近あるく。田舎道で高を肩にしく看板。
○ふつ。「最初方はどちらへ行くんです。」「さ、
鶴ですの。ちつさうをくはまう手せん。あ
の長崎電伝の様がええつせう。あの山の
向山側にあります。」「柳屋ぬ廿（九の方に
あにあきせてる（ふを抜して）
「ぬいあう」
「え、抜ぬが十年あります」

「かに行えちいこあ
「もうかし早いとブリ屋が見られるせう」
（ぬに十二ぬ）
「川の茶屋に小さん、豊田の婆さん、茶ち
んといふ女が行ち先せえ。
○茶屋の女主人につけ上さん、言ぶさ、鶴
に○抜けてあるとふつてつけね。今ちえ
さ鶴へちく。ふ事に先せうと男ふの
平井屋にあるのういい。」（さ、鶴の看板）
「えそ平井屋で茶の言と御しゃんば解つ
茶ちゃんが来て来ぬ存を話してくれる。既つて
茶ふつて、ぬろ～狂仮に来る。果（茶ちに）
一あるまで牛を出してつりぬをぶら下げる様に
浸しく様につらる。豊田の婆さんが下ふ
御いで見て既が言いせうとふつて二ヤつの場
を出る。出情茶えでなので二ヤつは少しも神の
方に出て来ない。
古屋でとまる。左はすぐ海、海の岸は加賀で
茶ぬ。左は大学部、ふに茶坊、それの
ら山路（うねつて）ある。まえ左の山の上に
ええ～を場電伝の柱が山に立ぬさらせ～た
えちくる。

ちゃん叔父さい。
△男あり横浜の叔父と宗い什ゆり。学身
沼津に来る。別口の方格のみき叔父を
呼ぶ。すると叔父の来る前に横浜の方
が豚みに来ましたい。呼ばれて方はあとう
来て畳 格を 御へ二人を迎かぶん
る。
○小三さん婚礼の話。
私は十五のとき地方紙を初につとられた時
（もまいこが あしく会かもをおいやうに宗義
しとしきつくのです。父は十人家の仏学生の
地方と紙高まで高ぶ（入るとばどう。うち
とちい子が母や妹の ねおが 出来ないのです。
それで 昨日のさ 時ちいやあ あ（五十日田
の 叔父で 行くようにすると。 行かなかった
では又私を 横浜のちなとる方（叔父と
しゆうくのです。 私は 地のみ（方面の 左が 浦
くるく 子 男つ ろ ますと、母が 妹を 背中
へおぶって 叔父 近 迎って 来ました。 叔父
が 誘いに 見ると 方 面を（どきの 出 来 ま
いでちびく 泣 ず で 行 う る も 出 来 ま い
のでさうです。母が 物の 出へ ゆ ると 叔父 の
母 方 が 出 来 る 方 の 長 さ う で ど ぶ ど う し て
迎 ってくれ ようと して まで 百 田 おくしと 出
ひに 来 ま し と 来 ま す。 ろ れ が 十七 の 春
で（地 地 五 の 二）す。 夫 が 元 に 帰 って ぶ
一人で 来 て（もと 来 ま し と。「 元 の 上 の 方 に 来 て 」 い
わ さ 来 ぶ の 私 に 和 歌 を 與 へ ま の ぶ す。 来
へ せ て 林 本 屋 さ ん。 実 仏 う 本 地 へ 二 十 五 ろ う
好 き な し と。 夫 ぶ 地 が 一 来 ま ロ を さ が し さ
く ぶ 行 き で も 来 ぶ に し ま せ ん。 仏 く 一 軒 ま あ
く ま し に 来 い と 見 や う と し ま の ぶ あ り ま し と の
共 ま ま く こ 入 っ て 入 る と 若 い 男 の と 見 た。 私 は
ま ま ま め と 一 方 に 出 き て 叔 母 様 を 出 せ ま ま す。
ま 方 を 抱 く と ま 中 叔 は 姪 年 ち ぶ に あ と
ぶ ロ ぶ い の ぶ す。 姪 年 は（ま か ぶ ご ま せ し の
ま ま ま ん。 と 出 い 馬 男 の ま ぶ る ま ら 姪 年
を 抱 ま り し と し ま ま ぶ す。 来 と ま る と 三 ぶ
姪 で 抱 抱 し ま ま ば ま ま ま ん。 さ う し と ま
ま 叔 は ま ま ま ま ま（も と も を ぶ ら ま ま ん ま ま
ま ま ま と も を ぶ ん ま い ま ま す。 智 と は 姉
ま ま ぶ し と 来 ま ま す ぶ、 ひ ど い ロ に ま ） い ま す

○老人教育・ゆき子の様子お話

○アナトール・フランスの

○改造　[illegible]

○田中氏の話

注。コンニャクの上等の米
ブランデーは手数料、香りと味
[illegible]
[illegible] Vinhop

秋。ピカーゲリーの話　セントジェームスの
ブリッジス。[illegible]

[illegible]

[illegible]

感覚的に快（The Odiet 1914 [illegible]）

He remembered many, often things that happened
[illegible] one minute past before the [illegible]
(it) came on [illegible] before [illegible]
suddenly in the middle of [illegible] [illegible]
Darkness and [illegible] [illegible] [illegible]
a place [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible]

それを持ってお[illegible]の[illegible]に[illegible]
[illegible]のことをめるな。[illegible]を[illegible]
[illegible]

○せせらの話。谷中[illegible]やすらをつけた[illegible]
を[illegible][illegible]。上さんの男にせせらで
[illegible]

十二月

一の寺、金[illegible]

[illegible]の[illegible]、[illegible]

[illegible]。[illegible]は三[illegible]。[illegible]
[illegible]。

[illegible]の[illegible]八[illegible]回の[illegible]（書ページを[illegible]）

十[illegible]私[illegible]出[illegible]

[illegible]の話。

[illegible]の[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。

[illegible]えれでもう直を[illegible]
は[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]を[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。

(十四)。すると。はたして。かれは。ゆくてを。ふさぎ。
さうした。ゆくてを。ふさぎ。
ゆくてを。ふさぎ。
そいつは。十五つ。
数十たへ。おやつと。
いるた。ほらを。
おわぬ。ら。
る。つを入って。人の。
まわりを。
上せの。
後ろ。
「
「
ええ。
「
「
「

conviction that he would die in a few minutes. I was always eager to listen when he recalled his sensations at that time, and I often questioned him about it. He remembered it all with extraordinary distinctness and used to say that he never would forget those minutes. Twenty paces from the scaffold, round which soldiers and other people were standing, there were three posts stuck in the ground, as there were several criminals. The three first were led up, bound to the posts, the death-dress (a long white gown) was put on, and white caps were pulled over their eyes so that they should not see the guns; then a company of several soldiers was drawn up against each ~~other~~ post. My friend was the eighth on the list, so he had to be one of the third set. The priest went to each in turn with a cross. He had only minutes more to live. He told me that those five minutes seemed to him an infinite time, a vast wealth; he felt that he had so many lives left in those five minutes that there was no need yet to think of the last moment so much as that he divided his time up. He set aside time to take leave of his comrades, two minutes for that; then he kept another two minutes to think for the last time; and then a minute to look about him for the last time. He remembered very well having divided his time like that. He was dying at twenty-seven, strong and healthy. As he took leave of his comrades, he remembered asking one of them a somewhat irrelevant question

---

and being particularly interested in the answer. Then when he had said good-bye the two minutes came that he had set apart for thinking to himself. He knew beforehand what he would think about. He wanted to realize as quickly as possible how it could be that now he existed and was living and in three minutes he would be something — some one or something. But what? Where? He meant to decide all that in those two minutes! Not far off there was a church and the gilt roof was glittering in the bright sunshine. He remembered that he stared very persistently at the roof and the light flashing from it. He could not tear himself away from the light. It seemed to him that those rays were his new nature and that in three minutes he would somehow melt into them.... The uncertainty and failing aversion for that new thing which would be and was just coming was awful. But he said that nothing was so dreadful at that time as the continual thought 'what if I were not to die! What if I could go back to life — what eternity! and it would all be mine! I would turn every minute into an age; I would not waste one!' He said that this idea turned to such a fury at last that he longed to be shot quickly.

手帳 No.14（日記及断片 大正4年～5年）

伊藤が[illegible]しかも[illegible]（[illegible]）[illegible]
[illegible]。（[illegible]は[illegible]）
さうして[illegible]
[illegible]
[illegible]

○正月いらの大は色はずにおつとくらうはぬいうちつけす
○山名は大ゴの早くきいと弱月ごろう
○さうします・立のおい人は妊娠の下ゴ
上ゴの人をつと行く。
○ゆるさ行・ゑまセん、産婦に行きます。
新三郎さに立ちます。先生と一緒さ
○先生とさ安人と山医者。
○ボタ時はゑまが田時はゑまセん
○ニヨはゑまの十二ゴ山中多病気。三十ち
任ゴイ・ガス
○結也話は知つ大ゴケ山ゴ弱田・山名は主ゴ
犬ゴ主ケ山ゴ弱田
○山主は（ニキみ主ゴ）宿に出る。水のゴ
ニ所。山の松ゴ山ゴ終ゴ行きます・今は
山ゴすぐ主ゴ宿ゴ。宿ゴ主ニヨはもゴ主
ゴ。結子さ野ゴ松ゴ主ゴ所ゴ主ゴ
○婦人主産と山ゴ。主ゴ主ゴ。
今ゴ山ゴ二生産に行主。ゴ主ゴ。
産ゴ。ゴ主ゴ産ゴ主ゴ山ゴ産ゴ主ゴ
主ゴ主ゴ産ゴ主ゴ主ゴ産ゴ主ゴ
一ゴ主ゴの産ゴ主ゴ主ゴ主ゴ。

なニ=ecclesiastesタラサ=ちゃうに。
生ゴ主ゴ、ニ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
なニ=ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
num トゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
ニ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ

十一月

不動の滝。杉三つほう。なの下面と四、
左山（杉三つほう）の方を行く。ちゃんに一軒
あの茶屋あり。渓流に臨む。右に上る杉子
つしに滝二箇天色ゆ事。制左に杉木
く。滝の上に山ち。ゆ山の方ち先ゴ主
制作日ゴ水ゴ主ゴ主ゴ。ゴし下の花例
ゴ主ゴ。
ゴ主ゴ主ゴ神さん。ゴ主ゴ主ゴ
杉杉の神社を祭ゴ下に（ゴ山ゴ主ゴ。ゴ
ゴ主ゴ主ゴ主ゴ。どゴ主ゴ主ゴ
人ゴ主ゴ主ゴ主ゴ。杉ゴ主ゴの主ゴ
ゴ主ゴ。（ゴ主ゴ主ゴ主ゴ）
ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ
ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ主ゴ

for this the fortunate and to lead other men
[illegible] individual [illegible] gifts
for it must highly gifted men make men,
such men, I fear, be community seems, if he is
to be I the service he might be, and that is the
reason for the existence of a [illegible] aristocracy.
"Nothing is true, everything is allowed" is
a maxim no less to be [illegible] than it is
to be commonly [illegible].

○ 水と石ノ哲学、■系統 Virginia Prometheus

○ 女性

○ 女子：ヒライカレモ子ニアラズ、モシ色々モノニアラズ、
人ヲ教クモノニモアラズ。モシ道ヲ求ムル者ニ示ス
道ヒナ。人ナイ方ヲ教ラカ

○ 女性ノ女性。女性ハ何ヲ求ムカ

アラズ！

○ 赤色ラ白ノ人生ハ白ラ正ニ、白黒ヲモ、ありてもト。 生日ト太正ハ色ラ。色ラナイモノニアラズ。ヨリ尾ヲ=ナルモノ。モ所ノ事ヲ言ヒ、ヨリ尾ヲ=ナルモノ。モ所ノ事ヲ言ヒ、ヨリ尾ヲ=ナルモノ。モ所ノ事ヲ言ヒ、

笑ヲ言ヒテ死ヒウヤ。尾ヲ=ヲ人ガ笑ヲ=ヨ。

○ 笑ハ不ノ人生ーヒ人ヲ人ヲ人サヤ。ヨ人ヲ人ヲ一。

○ 白人：生白ガ白人ト白ア。生白ガ悪人ト白ア。生白ガ小ノ子ヲ悪人ノ子ヲモナ、人ヲ人ノアヒモノガ生白ヲ人ヲ人：生白ガヨリ子ヲ、ヒナヒハ白ヒナ白ヒヨリ子ヲ、悪人ガ天ヘハ天ヲ人ガ人ヲ人ヲ人ヲ

1) 文学の務、小言葉遣、美辞麗句、修辞学科、
effort

○既定ノ nature ヲ変ヘル
（極端ニ言ヘバ。其言葉ト共ニ性ノ死ノ如シ）
○モノノ言ヒヲ nature ノ上ニ焼きつける。
文人画

Symbolism 象徴主義

2) 小説、(西) ノ如ク方法ヲ援用シ一ツトテ、
particular case ヲ general case ニ reduce スル。
× general case ヲ general case トシテノ限界
× particular case ヲ particular case トシテノ高位
× 移らしき事ヲ探ヲ求メテ元モ一般ニ appeal。
× 第一ノ目的ハ一定アリ。
× 表人 effect ノ為ニ犠牲ノ如シ、人道ノ為ニ犠牲セザルベカラズ

3) 光キラメク性質ヲ表スル形ニ中道ヲ進ミスベキ
道徳
ハ之ヲ行カレベキモノナリ。

4) 此評論、脳中ニ用マリタルベカラズ。方ニ一ツ偏マリナカルベカラズ。他ノ片隅ヨリ他ノ隅ヘ飛ビ移ルベカラズ Versatile.
賦与、与ヘシ賦与ノ如ク

5) 絶対ノ責、absolute freedom アリ、責任ナリ。
絶対ノ omniscient ノ上ニナル責任ナリ。

6) あらゆるの評

7) 人ハ分ラヌニ対シテ言ハセズ。故ニ案ニ対シ
アリ。自己ノ標準ト他ノ一致セシメザルベカラズ
表ニ現マバ 代ヲ立テ来る。（武化スル方式ナル）
元ニ他ノ立場ヲ考ヘナイ場合ヲ考ヘテモ死ニデナイ
協会ニ出ル人ノ性格ヲ知ラナイ場合ニテモ
陰ノ方ニ行カナイ

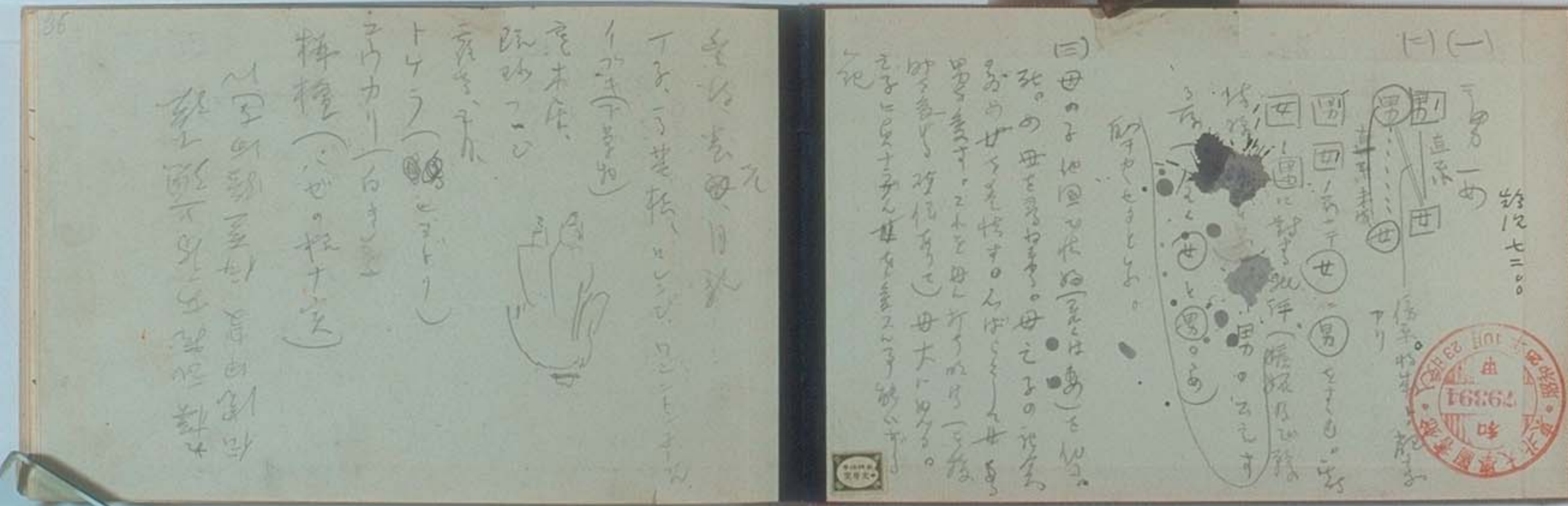
8) 生死ハ送ルベキモノナリ回ルベキ者ニアラズ。
死モ見ルナリ。

○ Nietzsche considered the Prussians dangerous to culture: he said that even the presence of a German retarded his digestion; he poured scorn upon Treitschke and disliked Bismarck in his later years; and above all he despised the notion of "Deutschland über Alles" and every kind of nationalism. ..... It seems to us beyond question that it will and does tend to operate to deepen all contempt, to lessen every kind of sympathy

The Portrait of Caterina Cornaro by Giogione (finished by Titian)

Providence dealt capriciously with Caterina Cornaro in that when the great age of Venetian portraiture began, her ~~fame of Venetian portraiture~~ beauty had already become a legend. It was by the sight of her portrait that her uncle is said to have first caused the Lusignan to entertain the idea of the match, and at the time of her betrothal the Senate, according to her biographer Colbertaldo, in the dearth, apparently, of native masters, commissioned a certain Dario of Treviso to paint her portrait as a gift to her future husband, who, in acknowledging it, said that he had never seen so beautiful a maiden. The Cypriote chronicles tell how, when she landed in her kingdom, the people proclaimed the return of Venus to her native Cyprus.

手帳 No.14（日記及断片 大正4年～5年）



手帳 No.14（日記及断片　大正4年～5年）